

叩いて餅の音さす」

「コレ擱いてや、此の寒いのにそんな事しられて堪るかいな」

「まア辛抱せえ〜」

「碌な事考え附きやへん情ないおやぢ。さア早ふ寝て仕舞ひなはれ」

「併し鼻、芽出度いなア」

「何が芽出度いのや」

「今夜餅搗きや」

「何云ふてるね、妾いは夜中にお臀叩かれるのや思ふたら、心配で眠られへんがな」

「豪い寒いなア」

「蒲團が薄いさかいや、ほんまにチト性根に入れなはれ、夫れでも子供は勢が良え、熱いかして、斯様暴れるがナ、鳥渡此子の足を押えてんか。妾いの寝間着を破るがな」

「破れたら又買ふたら良えや無いか」

「まア、口に交番所が無いと思ふて、豪ら相な事云ひなや。破れたら買ふやなんて、お前はんと世帯して永年になるけど、まだ腰巻一枚買ふて呉れた覚えが有るかいな、妾いが奉公してた時分に貯めて有た腰巻を、せんぐり出して遺ふてたのが、あと月で仕舞になつたのや、女が腰に何も巻かんのは便

りないと思ふて、此間から風呂敷を巻いて居るのやで、昨日も洗濯しやうと思ふて、ウツカリ着物の裾を捲つたら、奥の妙香はんに見附けられて、お咲さん貴女のお腰に大きな桐の紋が附いておますなア、お宅は師直の親類だすかや云ふて素見されたや無いか、他の人まで同んなし様に、豊國さん、ドエライ御威徳や云ふて蹴るさかい、妾い赤い顔したや無いか、しよむ無い事云ふてんと、早ふ寝なはれ」叱られ通して其まゝ、グーツと眠て仕舞ひましたが、鼻んツの方は矢つ張り近所へ體裁が張り度いと見えて、夜中に親爺を起してなはる。

「コレ、親爺さん、起きんか、……コレ起るのやがナ……まア此親爺の顔わいな。男の寝顔は可愛らしいもんや云ふけれど、内の親爺の寝顔は不都合過ぎるワ。家主の息子が人間の先祖は猿や云ふてはつたけど、此親爺は御先祖の顔を遺物に貰ひよつたんやろか。出雲の神様も無情んお方や、こんな男と縁結んだりして。それも引き結びにでもしといて呉れたら、シヤラ解けなとするやろに、糞結びに結んだアる依てに解けもしやへん……ア、鼻から提灯出してるワ。お祭の夢でも見てよるのかいな。……ア、引込だ……雨でも降て来た處か知らん……。ア、又出た、せんぐり〜仰山出て来るがナ。提灯行列の夢かいナ。コレ親爺さん起きんか……」

「ウム。ムニヤ〜〜〜」

「何ちウ顔をするのやいな。コレ、確かりしんか」